

“-able City” (エイブルシティ) を構想する

#01

“-able City (エイブルシティ)”とは何か

白井瞭さん(25歳)は、シンク・アンド・ドゥタンク(株)リ・パブリック(RE:PUBLIC)から創刊されたトランスローカルマガジン『MOMENT』の編集長である。創刊号では特集「-able City(エイブルシティ)」(以下エイブルシティ)で、新しい都市のあり方が提唱されている。今後の社会や市場のあり方を指し示すこの概念について、話を聞いた。

エイブルシティとは何か

エイブルシティとは「人間の可能性を

ひらく都市(規模は数千人から百万都市までいろいろ)」であり、「まちへのオーナーシップを背景に、市民が主体的に暮らしをつくりだしていく都市のあり方」を指す。本誌には、人が自分のまちの中で、自分が欲しいものや暮らしを、テクノロジーの手も借りながら、自由に自分たちの手で作り出すことができるようになるとはどういうことか、どうすれば今のまちをそのようなまちに変えていけるか、を考えるための材料が並んでいる。それを象徴するのは、“Edible Street(食べられるストリート)”や“Skatable Sewage(スケートできる下水道)”など、-ableのダッシュ部分にいろいろな動詞を代入したスケッチである。

スマートシティとユーザー化

白井さんは、エイブルシティという概念が生まれた背景には、人間の総ユーザー化は果たしてよいことなのかという問題意識が存在すると言う。

GAFに代表される巨大なデジタル

企業により、人間の生活はより安心、便利、快適なものになっている。その究極がスマートシティと呼ばれる都市の姿である。そこでは人間は何かを自分で選択しているようで、実は差し出されるものをただ利用する1ユーザーでしかない。企業やメディアでさえ、巨大なプラットフォームに最適化する中、少数のプラットフォームだけがデータを管理し、巨額の利益を得ることになる。そのような状況は果たして人間にとって幸せなのか。もう少し主体的に暮らしを作っていく都市のあり方があってもよいのではないか。

発想の原点

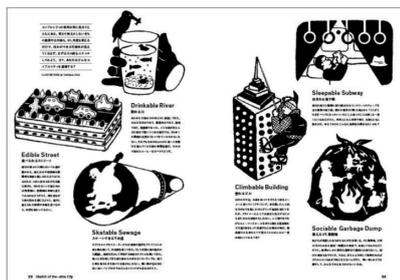
エイブルシティの発想は『MOMENT』の取材過程で生まれてきたものだが、その原点の一つが、本誌にも紹介されているFabCity(ファブシティ)である。これは市民によるものづくり工場のムーブメントから生まれ、デジタルテクノロジーの力を借りて“消費するあらゆるものを生産する”ことで、環境負荷を減らし、持続可能性の高い都市を目指す運動である。現在では世界28都市(日本の鎌倉市も)が「ファブシティ宣言」を行い、毎年カンファレンスが開かれている。

ファブシティで重要なのは自律分散型のシステムだ。生産と消費をローカルな循環で完結するための知識やアイデアはデータとしてグローバルに共有され、それが市民の自発的な活動につながる。

白井さんはこの仕組みに着目、市民を取り巻く環境や資源、技術の制約の中で、どうにかしたいけれど一見するとできない(Disable)と思われる状況を、異なる場所や異なるコミュニティの異なる視点で読み解き直すことで、新たなできる(Able)状況に転換するというエイブルシティの発想が生まれた。



上：『MOMENT』の創刊号表紙
 右上：『MOMENT』の編集長の白井瞭さん
 右下：エイブルシティのイメージスケッチ(Sketch of able city)『MOMENT』1 pp.22-23



#02

“-able City (エイブルシティ)”の 先駆的活動

『MOMENT』では、エイブルシティの先駆と考えられる国内外の7つの活動とその実践者のインタビューを紹介している。

バルセロナの 「スーパーブロック」

バルセロナ都市生態学庁が展開する、都市を車中心から歩行者中心へと変える社会実験。約400m四方の街区を一つの「スーパーブロック」として、車の乗り入れを制限。車道として使われていたスペースを近隣住民が主体となって用途を検討し、公園やイベントスペース、市場等の空間へと変えていく。

同庁の創設者兼ディレクターのサルバドール・ルエダ氏は自身のルーツであるジャングルの生物多様性研究に基づく考え方として、都市における住民同士の組織体(リーガル・エンティティと呼ばれ、ルエダ氏はそれを生物学の「種」になぞらえる)の複雑性(多様性)が高まれば高まるほど、都市全体のエネルギーと自然資源の消費を減らし、住民の生活の質と都市の持続可能性が高まると述べている。

バルセロナの別の事例として、住民が小型センサーを利用して近隣の環境(騒音、大気汚染等)データを自分たちで計測し、そのデータを集積することにより、市



上：バルセロナの「スーパーブロック」の一例。車道だったスペースが公園に『MOMENT』1p.12

右上：『ファブラボ阿蘇南小国』のFacebookページ <https://www.facebook.com/FablabAsoMinamioguni/>
右下：『Good Job!センター香芝』で作られた張子のマスコット「GOOD DOG」



民自らが公共政策に対する提案力を高めるプロジェクトも紹介されている。

ファブラボ阿蘇南小国

熊本県阿蘇山の麓、人口約4,000人、良質の杉の産地として知られた南小国町に2軒だけ残った製材所の3代目である穴井俊輔氏が作ったショップ併設のものづくり拠点。「日本で一番アクセスが悪いファブラボ」というこの施設には、レーザーカッターや3Dプリンタのほか、大型の自動木工マシンも備えられている。ここの利用者はさまざまだが、穴井氏が力を入れているのが町内の小・中学生のサポートである。外から来るデザイナーや作り手と出会い、地元の小国杉を使ったものづくりを体験することで、「まちの子どもが目にする大人の姿は公務員か兼業農家、さもなければスマホの中にいるYouTuberだけ」という状況から一歩抜け出し、何十年というサイクルで回っていく林業のサステナビリティのために「子どもたちと一緒に未来像を考えて、『種]をまく」ことを目指している。

Good Job! センター香芝

障がい者アート「エイブル・アート・ムーブメント」をけん引してきた奈良「たんぼぼの家」が、「誰もがはたらく喜びを実感でき、主体性をもって暮らせる社会へ」をコンセプトに、障がいのある人と共に新たな仕事をつくり出すことを目的として設けた新しい施設。それが『Good Job! センター香芝』だ。常務理事の岡部太郎氏は「ここは、障がいのある人の表現と、それを活かしたいと考えるデザイナーや企業をつなぎ、プロダクトの開発・製造を通じて新たな仕事づくりをする場」と言う。

「福祉」「アート」「ビジネス」といった垣根を越え、例えば、障がいのあるアーティストが作った伝統的な張子のクマをスキャンして胴体を伸ばし、3Dプリンタで出力して型を作成。それにセンターのメンバーが紙を貼り、仕上げの着色をした「GOOD DOG」というマスコットのようなオリジナル商品が生まれている。

#03

“-able City (エイブルシティ)”を育てるために

先駆事例から見えること

『MOMENT』で挙げられている事例に共通するのは、自分たちが住む地域にあるさまざまな資源を住民自ら発見し、それを資本化し、価値をつくっていくことだ。まちをうつわとし、その中でそれを使いながら何かを生み出していくこと、つまり、主体的に自分たちのまちの姿を捉え直し、何かをつくってみること、個々のまちに生きている人が自分たちで自分の活動を定義していくことが、エイブルなまちをつくり出すパワーになる。

プレイフルでコレクティブであること

エイブルシティ実現のために重要なことの一つはPlayful(プレイフル=遊び心のある)な感覚だと白井さんはいう。大きな組織や地域の日常生活の中では、どうしても人は課題解決型のマインドセットになることが多い。しかしそれでは主体性や自発性が生まれにくい。既に与えられた個別の問題に対処していくのではなく、自分たちの日々の暮らしの中にいま存在するものの価値を新たな視点で読み解き直し、別の解釈を加えることで、人々の創造力が引き出され、やらされるのではなく、主体的に何かを生み出したいという意欲が生まれる。その意欲に、不足している資源や技術を補充し、意欲を現実的に「できる」力を育てることで、人は単なるユーザーから脱却し、エイブルシティがつくられていく。

もう一つ重要なことは、Collective(コレクティブ)という考え方である。アムステルダム応用科学大学マータイン・デ・ヴァール氏は、Citizens(市民個人)と

Institutions(公共機関、行政)をCollectives(コレクティブ=自分たちが暮らすまちに対する思いや願いを持つ人が思考し、行動するところから生まれる有機的な集合体)が結ぶという模式図を示している。多様なプレイヤーが資源を持ち寄り協創することにより、まちを多角的に捉え直すことができ、個人と公共機関の両方がエンパワーされる。

エイブルシティへの第一歩

リ・パブリックが2019年2月に佐賀で手掛けた「ニューノーマル展」も、エイブルシティへの試みの一つと捉えることができる。ニューノーマルとは、伝統的なものづくりと地域文化を現代の暮らしに取り入れて、その地域独自の豊かな暮らしを創造していく活動である。地域でつくられているものの新しい使い方について、地元の〈つくり手〉と〈つかい手〉に、外部からの専門的な視点と経験を持つ〈一緒に考える人〉を加えた研究会をつくり、土地に根ざした「明日のふつうな暮らし」を提案している。

来場した地元の方の中には「これは私たちがいつもやっていることね」とうれしそうに語る人もいたという。これまで特に価値を感じなかった当たり前のものやことが、立場の異なる人々がスキルや視点を持ち寄って楽しむことで新たな価値を生む資産として再発見されることは、エイブルシティを育てる上での第一歩として注目される。

今のところ、こうした試みは地方都市で先行しているようだが、Neighborhood(近隣)の資源の見直しによる、住人がしたい生活の実現に向けての創造的トライアルは、今後、大都市でも広がっていく可能性が高い。『MOMENT』の豊富な事例とインタビューはそのための示唆を与えてくれる。



左：コレクティブの模式図『MOMENT』1 p.59
下：佐賀県庁で開かれたニューノーマル展は、半年間の活動の集大成でもある。
<http://new-normal.life/>
<https://www.facebook.com/NewNormalSaga/>

